

「 身近な土砂災害防止について 」

滋賀県立守山中学校 1年 富山 幹太

私は、この夏休みに大雨の影響で九州地方で土砂災害が起きていたということをニュースで見ました。そのため、多くの人が避難し、また、多くの家屋や農作物にも被害が出ました。日本は土砂災害が起りやすい国といわれています。国土の多くが山地にかこまれており、山も川も勾配が急です。そのため、大雨や台風などによる豪雨のたびに、土石流、地すべり、崖崩れなどの土砂災害が各地で発生しています。そのため、これまでどのような対策がなされてきたかを調べて、また、自分が家族や地域のために何ができるかを調べてみました。

私が住んでいる家の近くに草津川が流れており、その上流に大津市上田上桐生という地域があります。そこには山林と清流に囲まれたキャンプ場があり、川の深さも浅いため、小学校低学年のころによく家族で水遊びに出かけました。その川の中には、石を組み合わせた構造物があります。そういった場所には小エビやメダカなどの水中生物が多く生息しており、水遊びをしながら魚取りに熱中したことを覚えています。しかし、遊んでいたころはその構造物が砂防ダムの「オランダ堰堤だと知りませんでした。今回、オランダ堰堤の情報を得るために資料を調べるために近畿地方整備局琵琶湖河川事務所（アクア琵琶）に行きました。そこの一室には、砂防資料館があり、オランダ堰堤ができるまでの資料があります。その資料によると、大津市の田上はヒノキやスギなど豊かな木々に恵まれた山々でしたが、奈良時代から江戸時代にかけて、都での寺社の建築資材や、製陶に使う燃料の目的で大木がどんどん伐採されて、はげ山となってしまいました。また、このあたりに広く分布する花岡岩の地質は、雨や風にさらされると、もろい砂になってしまう性質があるため、大雨になると山から大量の土砂が流れ出し、下流の地域では土砂災害が勃発していたそうです。今まで歴史を学んできましたが、都のために滋賀県の木が切られ、このような問題が発生していたことを初めて知りました。そしてこの対策として、政府は明治時代に山腹工事で樹木の植林を行い、また草津川流域の砂防工事の一環として、オランダ堰堤を整備しました。堰堤とは、上流から流れ出す土砂を止め、土砂災害を防ぐために石積みした砂防ダムのことです。「オランダ」という名前は、明治時代に日本に招かれ治水工事を指導したオランダ人技術者「ヨハネス・デ・レーケ」に由来しているそうです。このオランダ堰堤は山腹から流れ出す土砂をせき止め、下流の土砂災害を大幅に減らしました。また、ヨハ・ネス・デ・レーケは、彼の治水技術をいかして滋賀県と福井県の境から流れる高時川と田川が交差する場所に「田川カルバード」を提案し、水害を大幅に減少させたそうです。

百年以上前に作られたものが、いまでも土砂災害を防ぐために機能していることに驚きました。こういった先人の遺産によって安全が支えられている面もあることを知りました。

私は、まだ災害につながるような豪雨を経験したことがありません。しかし、近年の異常気候により、線状降水帯やゲリラ豪雨が発生し、いつでもどこでも土砂災害がおこる可能性があります。オランダ堰堤などのこれまでの先人の対策では防げない土砂災害が発生するかもしれません。そのため、自分自身の身を守るための、指針（自助）を確認しました。川の水がにごったり、流木が混じると土石流がおきる前兆かもしれません。また、斜面がひび割れて小石が落ちてくることはがけくずれの前兆かもしれません。地鳴りは、地すべりの前

兆かもしれません。こうした前兆をとらえること（知ること）で土砂災害にあるリスクを減らすことができると思います。そうした場合には避難することが大切ですし、できることなら事前に避難できる場所を確認することも大切です。今回市役所の情報を調べてみると、土砂災害ハザードマップというものがありました。自分の住んでいる場所が、土砂災害警戒区域かどうかを確認し、さらに避難場所と避難経路を確認しておくことが大切だと分かりました。近所の人は、みんな高齢なので、避難するときには、声をかけて、いっしょに避難することも大切だと思います。

私は、市のハザードマップで調べてみると、自分の家が土砂災害の影響をうけるかは分かりませんでした。でも、もしかしたら洪水の水といっしょに土砂が流れてくるかもしれません。だから、土砂災害が絶対こないと思わないように気をつけたいです。徒歩一分で行ける避難場所が近所にあったので、災害が起きたときには、そこに地域の人と避難しようと思います。

「土砂災害は防ぐことができるのか」

東近江市立五個荘中学校 2年 藤野 友基

令和3年7月3日、静岡県熱海市で、28人が亡くなる土石流が発生しました。加えて、令和7年8月にも、熊本県で土砂災害が起こりました。そんな土砂災害による被害総額は、数千億円規模になる年もあったそうです。近年多発している土砂災害の要因として私は環境的要因と人為的要因の二つに分けて考えました。

一つ目は、環境的要因についてです。近年は、地球温暖化により海水温が上昇し、線状降水帯が多発しています。線状降水帯は、列状に積乱雲が発生し、その土地に激しい雨を長時間降らせます。その結果、地盤がゆるみ土砂災害が発生させます。同じく地球温暖化により、台風も一つ一つがその力をより強力なものにし、通過・上陸する地球に甚大な被害をもたらすでしょう。令和元年の台風19号では、北陸新幹線がその影響で浸水し、多くの車両が廃車になったことが報じられていました。

環境的要因には、気象だけでなく、その土地自体も含まれています。先に述べた、熱海市の土石流の原因にも、これが絡んでいます。例の災害の起点は、集水地形と呼ばれる地形の土地でした。その名のとおり、非常に雨が集まりやすいのです。また、過去の大雨によって地盤がその度に緩み、そこに線状降水帯等の大雨がとどめの一手を指すことで、その土地が崩壊することもあります。大雨警報が解除されても、土砂災害への警戒を呼びかけるのは、このような事態を鑑みてのことでしょう。

環境的要因として最後に思いついたのは動物、特にシカによる食害です。かつての日本の山の生態形の頂点はニホンオオカミでした。しかしそれは、人の手によって数を減らし、今までは絶滅したと考えられています。捕食者がいなくなったことで数を増やしたのがシカです。捕食者が被食者を食べることで、その数を調整する自然の関係を壊したために、バランスが崩れた結果です。シカは、山の草木を食べ、枯らしてしまいます。植物の根は、山肌をより強固なものにすることができますが、それが枯れると土砂を支えられなくなってしまいます。また、シカはその繁殖能力を活かし、個体数を更に増やします。更には、地球温暖化がシカにとって適切な環境を与えていることもあり、シカによって山がはげってしまうこともあるそうです。

他にも、地震によって地盤が緩み、山の一部が崩れたり、その後の雨で崩れなど、間接的に災害に作用することも多いのです。

二つ目に私が挙げるのが、人為的要因です。例の、熱海市の土石流は、違法な盛り土により、周辺地域への被害がより大きくなったそうです。盛り土は地盤が軟弱になりやすいため、土砂崩れのリスクがあるそうです。しかし、この場合は業者が市に提出した計画の約二倍の量の盛り土が、実際に施されていたそうです。

また、過度な森林伐採によって山の地盤が弱くなり、土砂崩れが発生することも、人為的要因の一つとして挙げられるでしょう。

では、土砂災害には、これらのような要因があることをふまえ、私たちには何ができるのでしょうか。

一番早い手段は、土砂災害の直接的な原因の大雨や地震をなくすことですが、そのような事は今の人類にはできません。気象や地殻を操つことは不可能であれば、人為的要因を解決し、「防災」ではなく「減災」を目標とする必要があると思います。先ほどの盛り土の話

に沿わせるのなら、十分な土地調査、違法な盛り土に対する罰則の強化などを行うことが必要となるでしょう。森林伐採やシカの食害により、山肌が露出した場所に植林をし、周りをフェンスで囲みシカ対策をするなど、山を元の姿に戻すことも減災に繋がると思います。そして、何より、一人一人が日頃から備えることが、減災において一番効果的だと思います。土砂災害を自分事として捉え、避難経路を確認して、身の危険を感じたその瞬間に行動する。それをするだけで、幾つもの命が繋がると思います。

地球が生きている限り、自然災害が無くなることはありません。自然が相手ですから、災害による被害を完全に無くすことも難しいです。それでも、自然災害によって奪われる命や、それで悲しむことが無い世の中を望みます。

国土交通事務次官賞

滋賀県知事賞

「土砂災害の恐ろしさと防災対策」

滋賀県立守山中学校 3年 駒井 福

この夏、全国各地で大雨による土砂災害のニュースを何度も見ました。茶色く濁った土砂が斜面にでき、今にも住宅地へ流れ込んでいきそうな映像や写真。また学校の授業で避難所で不安そうに座る人たちの映像を見たこともあります。テレビ越し、画面越しでも、その恐ろしさや被害の大きさが伝わってきました。実際にその場にいたらどれほど怖いだろうかと思像すると、胸が苦しくなりました。

私は滋賀県に住んでいます。滋賀県は琵琶湖が有名であり山などに関するイメージはないと思います。それに、私の住んでいる地域では大きな山崩れや土石流の被害を聞くことはほとんどありません。正直なところ、これまで土砂災害はあまり関係のないことだと思っていました。実際、学校の避難訓練やニュースを結びつけて考えることはあまりありませんでした。しかし、最近のニュースを見て、考えが変わりました。土砂災害は山の近くや川沿いだけで起こるのではなく、予想外の場所でも発生することがあるということを知ったからです。実際、全国の被害状況を調べてみると、これまで土砂災害が少なかった地域でも、大雨によって斜面が崩れたり、川が氾濫したりする事例が増えているそうです。地球温暖化の影響で、これまでの経験や記録だけでは予測できない雨が降る時代になっているのだと思いました。経験がないからこそ私は土砂災害が怖いです。実際にどのように起こるのかを体験したことがないので、避難のタイミングやもし起こったときの安全な行動がわかりません。避難情報が出ても、まだ大丈夫なのではないかと思ってしまい、逃げ遅れるかもしれないという不安があります。ニュースで被害にあった人の多くが、まさか自分の家が危険になるとは思わなかったと話していましたが、その気持ちが少しわかる気がします。また、実際に被害を受けた地域の映像を見ると、家が崩れていたり、道が通れなくなっていたり、自然の力の大きさを改めて感じました。

このまま何も対策をしないで行くのは危険だと感じ、昨年家族で防災対策をすることにしました。まず、もし災害が起こったときに避難する場所を決めました。平日の午前中は特に家族の全員が違う場所にいるので集まる場所や家族が一旦避難する場所を共有しました。次に、雨の日などに危ない川沿いの道なども共有しました。そのときに、道によっては雨で滑りそうなところや段差が危ない場所などもあり、それも共有しました。そして、避難場所への一番安全なルートも決めておきました。さらに、非常用の防災グッズも用意しました。水や食料、懐中電灯、モバイルバッテリーなどを揃えました。また、防災グッズは一度揃えたら、それで終わりではありません。賞味期限が切れたり生活環境が変わり必要な物が増えたりもします。防災グッズの中身を定期的を確認することも大切だと思いました。こうした準備をしてみると、少し安心感が生まれました。同時に、自分の地域は安全だから大丈夫という思い込みが一番危ないのだとわかりました。災害は、いつ、どこで、どんな形で起こるかわかりません。だからこそ、経験がない地域に住んでいる人こそ、しっかりと備えることが大切だと思います。

これからもニュースや天気予報を注意して見て、雨が強く降る予報が出たら早めに行動するようにしたいです。家族、身の周りの人の命を守るためにできることを考え、準備を続けていきたいです。そして、この気持ちを友達や地域の人たちにも伝えていきたいです。土砂災害の被害にあう人が一人でも減るように、私たち一人ひとりが意識を持って行動して

いくことが必要だと強く感じています。そのために、日頃から防災に関する情報を集めたり、訓練に参加したりなど些細なことも忘れずに取り組むようにしたいです。災害は防ぐことができませんが、私たちの工夫次第で被害を小さくすることはできると思います。少しずつ今からできることを実行するようにしたいです。

「 災害が起こらない場所 」

東近江市立能登川中学校 1年 浅子 晴香

今年の夏休みは、父と母、そして私の三人で北海道に旅行に行きました。ある朝、ホテルのテレビをぼんやり見ていると、鹿児島で大雨が降っていることを放送していました。

「怖いね」と母と話していると、母が前に経験したことを話してくれました。

私の母は山口県生まれです。山口県は、自然災害がそれほど多くなく、住みやすいところだそうです。でも、最近は変わってきたということです。

山口県の宇部というところに、母の祖母、私のひいおばあちゃんとおじさん夫婦が住んでいました。私も小さいころ、よく遊びに行きました。家は山の斜面にあって、すごく眺めが良いのですが、裏手には山がそびえています。母が子どもだったころ、よく泊まっていたそうです。

「窓のそばにすぐ山があって、ねるときは、くずれるんじゃないかと思って、いつも怖かった。でも、晴香のひいおばあちゃんが『ここは絶対にくずれないから。くずれないところに家を建てたから大丈夫』と言っていたのでそれを素直に信じていた。でも、晴香が小学1年生のとき、ものすごい大雨が降って、ついにくずれちゃった。」ということです。

当時、そういうことがあったのは、ぼんやりと覚えていたけど、くわしくは知りませんでした。

「ちょうど私が入院しているときでね、母（私のおばあちゃん）が滋賀に来てくれていたんだけど、退院して家でテレビを見ていたら、おじちゃんが出ていたのよ。裏山がくずれて家が全かいしたって、インタビューを受けていた。母と二人でびっくりして、それから大さわぎよ。母の家にひなんしてもらおうにも滋賀にいるから、どうしようもできないし。結局、窓をこわして家に入ってもらった」という話でした。

おじさんによると、その日夜中ずっと雨が降り続いて、ひなんしようにもできず、さすがに気持ち悪いので、家族三人で裏山から一番遠い部屋でねていたそうです。そして、しばらくしてものすごい地鳴りがしたかと思うと、一気に土砂がなだれ込んできて、家が押しつぶされました。母が子どものころにねていた部屋も完全に土砂でうまったそうで、母は血の気が引いたと言っていました。

ひいおばあちゃんたちは、住む家がなくなってしまって、しばらく祖母の家にひなんしていました。家を再建するまでに、三年もかかったそうです。おじさん夫婦は、すぐに仮住まいの家に引っこしていきましたが、ひいおばあちゃんが高れいなので、一緒に住むのはむずかしいと、介護施設に移りました。土砂災害がなければいまもずっと三人で暮らせていたはずなので、とてもかわいそうに思いました。

でも、三人生き埋めになってもおかしくない状況だったので、生きてくれてただけで良かったと母は言っていました。ただ、ひいおばあちゃん達は、奇跡的に助かったわけではないと思います。夜中に無理にひなんしていたら、増水した川に流されていたかもしれない。土砂がくずれてきても大丈夫なところにいたから、巻き込まれなかった。そのときの状況に合わせて、一番良い行動が取れたから。助かったのだと思います。

私が母の話聞いて思ったことは、「災害が絶対におこらない場所なんてない」というこ

とです。私もいつどこで災害に合うか分からないので、どんな状況でもパニックにならず、落ち着いて行動できるようになりたいです。そのためにはどうしたら良いのかというと、とにかく災害への備えをしておくしかないと思います。これから、父と母と話し合いながら、うちで必要な備えとはどんなことなのか、考えていきます。

ひいおばあちゃんは、もうすぐ百才になります。北海道旅行から帰って、山口のひいおばあちゃんに会いに行きました。すごく元気そうで、私の手をうれしそうに、にぎってくれました。

滋賀県河港・砂防協会会長賞

「土砂災害はすぐそばに」

東近江市立五個荘中学校 2年 川島 唯

私の家のすぐ後ろには山があります。普段はその山の自然がとてもきれいで、家の前の小さな川の水の流れや風も心地よく、緑豊かこの場所で暮らせることに安心感を持っていました。そもそも、ここ滋賀県は比較的自然災害が少なく、地震や洪水による津波の心配もありません。そのため、私は避難に至るような大きな自然災害にあうことなく育ってきました。

しかし、最近ニュースで大雨などによる土砂災害が報道されるのを見て、私は「この山がもし崩れたらどうなるのか」と、ふと考えるようになりました。そして、それまでほとんど土砂災害のことを意識していなかった自分に気がつきました。

これまで私は「自然災害はテレビの中の話だろう」「自分は大丈夫だ」と土砂災害について自分と関連させようとせず、災害対策から逃げてしまっていたところがありました。実際家族でも土砂災害について話し合ったことはほとんどありませんでした。しかし、近年は気候変動により、大量の雨がよく降り、今まで災害が起きなかった地域でも被害が出ていると知りました。私の家のように山がそばにある場所は、土砂災害が起きた際のリスクが高いとされています。それなのに、私はその危険性について、真剣に向き合ったことがなかったのです。

では、どうすれば自分の命や家族の命を守ることができるのでしょうか。そのことについて調べ、考えました。

土砂災害による被害防止においてまず大切なのは正しい知識を持つことです。自分の家がどのような場所にあり、土砂災害の危険がある地域なのかどうかを知ることが第一歩だと私は思います。そこで、都道府県で市町村が作っている「ハザードマップ」があります。ハザードマップは起こりやすい災害やその程度、避難ルートなどがわかると学校の地理の学習で学びました。私も住んでいる地域についてハザードマップで調べてみました。すると、私の家のある地域が、「土砂災害警戒区域」に入っていることが分かりました。それを知り、土砂災害が身近なものだということを強く感じたのと同時に怖いと思いました。

次に重要なのは、「早めの避難」です。土砂災害は具体的に、がけ崩れ、地すべり、土石流の三つに分けることができます。がけ崩れは、急な斜面が突然崩れ落ちるもので、地すべりは斜面全体がゆっくりと動いていく現象です。そして、土石流は雨水と混ざった大量の土や石が、一気に流れ下る現象で、非常に危険です。もし大雨が降って、警報や注意報が出たら、「まだ大丈夫」と油断せずに、すぐに行動することが命を守るカギになります。特に夜間や雨の音が激しいときは怖くなってしまい、どうしても避難の判断が遅れ気味になってしまうと思います。そのため、避難するタイミングはどうするか、どの避難場所に行くかを事前に家族と決めておきたいです。

しかし、避難場所やルートなどが分かっているとしても、一人では逃げきれないかもしれません。そこで私は、地域でのつながり、協力も大切だと思いました。特に高齢の方や体の不自由な人は、周りの助けが必要になってきます。私の地域では、特にご高齢の方が多いです。そのために地域の防災訓練に積極的に参加をしたりすることで日頃から地域の人と協力意識を持っておきたいです。中学生である私も、「まだ大人ではないから関係ないことだ」と思わず、今できることを考えて行動していくべきだと思いました。例えば避難時の声かけならば

私でもできます。

災害に対する防災意識は過剰である方が適しているのかもしれませんが。「明日、家が土砂に巻き込まれるかもしれない」と日頃から気をつけることで災害時に必ず盾になると思います。私は今まで、土砂災害を他人事のように考えていました。しかし、自分の家のすぐそばにある山が、ひとたび大雨によって崩れる可能性があるを知って、「自分の命を守るのは自分だ」という意識を持つことができました。

自分の命を守ることは、家族や周りの人を守ることにもつながります。災害はいつ、どこで起きるか分からない恐ろしいものだからこそ日頃から土砂災害への意識を高め、家族や地域の人と協力していきたいです。

「命を守るために」

滋賀県立守山中学校 3年 谷井 麻友

私たちの住む日本は、その豊かな自然と共存する一方で、数多くの災害リスクを抱えています。地震や津波、そして台風や豪雨によって引き起こされる土砂災害は、毎年どこかで多くの人々の生活を脅かしています。特に近年、地球温暖化の影響で集中豪雨が頻発する現実を前に、土砂災害が身近な問題になってきていると感じています。それらから命を守るために、私たちには何ができるのでしょうか。

まず、土砂災害がどのようなメカニズムで発生するのか、その本質を理解することが不可欠だと考えます。土砂災害には、急な斜面が崩れる崖崩れ、土砂や岩石が水と混ざって流れる土石流、そして広範囲の斜面がゆっくりと滑り落ちる地すべりの三種類があります。どれも一瞬にして人々の生活や命を奪う可能性があります。地形や地質、そして雨量など複数の要因が重なって、災害へとつながっていくのです。私の家の近くには、古くから住宅が立ち並ぶ場所があります。最近のような記録的豪雨が降ったらどうなるのだろうと考えると、本当に怖くなります。学校や地域の防災訓練は、そのようなことが起こった時にあせらず自ら考えて行動する力を養うためにあるのだと、私は思います。

身を守るための第一歩として、ハザードマップの確認があります。ハザードマップとは、災害記録や地形データに基づいて、土砂災害や洪水などの危険が予測される場所を示した地図のことです。これを見ることで、自分の住む地域や通学路が危険区域に含まれているかどうかを知ることができます。しかし、私はただ危険な場所を知るだけでは不十分だと思います。なぜその場所が危険なのか理解することが大切です。例えば、近くに急な斜面がある場合、土石流や崖崩れが起こる可能性があります。こうした知識を持っておく事がいざという時の冷静な判断につながるのだと感じています。さらに、土砂災害を知らせる情報に敏感になることも重要です。テレビやインターネットを通じて発信される気象情報や自治体が発表する避難情報、特に土砂災害警戒情報には、常に注意を払う必要があります。これが発表されたら、すぐに避難を始める準備をしなければなりません。ですが、夜間や豪雨の中での避難はかえって危ない時があります。だからこそ、日頃から家族と緊急時の連絡手段や避難方法について具体的に話し合っておくことが大切だと思います。

個人の備えだけでなく、社会全体としての取り組みも着実に進められています。その代表格が砂防ダムの建設です。砂防ダムは、山から流出する土砂を受け止め、下流への被害を防ぐ役割を持っています。その他にも、斜面の補強工事や雨水を円滑に流すための排水路の整備も重要な防止策です。私は小学生の時に、学校の社会科の学習で砂防ダムを見学しました。その巨大な構造物と、そこにたまっていた大量の土砂を目の当たりにし、改めて土砂災害の破壊力を思い知らされました。同時に、それを防ぐために尽力する人々の存在を強く感じ、とても感動しました。これらの対策は、専門的な知識と技術を持つ人々が、長い時間をかけて計画し実現してきたことなのです。私たちは、こうした対策に感動しつつ、自分たちができることを行っていかなければならないと考えています。日々の生活の中で、天気予報を注意深く確認し、通学路の危険な所に意識を向け、家族と防災について話し合う。これらは誰にでもできるささやかなことですが、いざという時、自分自身の命を守ることに繋がると思います。

土砂災害は、いつどこで起こるか予測できません。だからこそ、私たちは常にもしものことを想定し、備えを怠ってはならないのです。それは恐怖に囚われることではなく、土砂災害のメカニズムを正しく理解し、自分の住んでいる場所の危険性を知り、家族や地域社会と協力して準備を整える、ということです。私たちが安心して未来を築いていくために、土砂災害への備えは不可欠です。それは単なる防災訓練ではなく、私たち自身と大切な人々の未来を守るための行動なのだと強く感じています。過去の災害から学び、その教訓を風化させることなく、次の世代へとつないでいく。それが最も大切なことであると私は考えます。

「小さな準備がわたしたちを守る」

東近江市立五個荘中学校 2年 植田 悠月

みなさんは、土砂災害がいつ、どこで起こるか知っていますか？

大雨のあと、山の斜面がくずれて、家や人が巻き込まれることもあります。こうした土砂災害は、私たちの身近な場所でも起こるおそれがあり、命にかかわるとてもこわい自然災害です。

最近では豪雨や台風が強くなってきていて、土砂災害が起こる回数が増えてきています。ニュースやネットの記事を見るたびに、「もし自分の町でこのようなことが起こったらどうすればいいだろう。」

「いざというときに正確な行動ができるのか。」などと思います。だからこそ、日ごろから土砂災害を防ぐための知識や行動がとても大切だと感じます。

土砂災害から自分や家族の命を守るためには、いくつか大切な備えがあります。

まずは自分の住んでいる場所が土砂災害の危険があるかどうかを知ることです。市町村が出している「ハザードマップ」を見ると、がけ崩れや土石流が起こる可能性のある場所が色分けされているので、とても参考になります。もちろん土砂災害警戒区域とされている地域に住んでいる場合は備えをする必要がありますが、土砂災害警戒区域等でない区域でも土砂災害が発生する場合があります。付近に「がけ地」や「小さな沢」などがあれば注意する必要があります。こうした情報を得ることで、万が一の場合にどこに避難すれば安全かを考えることができます。

次に避難の準備をしておくことです。雨が降り出したら土砂災害に関する情報に注意し、すぐに安全な場所へ移動できるように、非常用持ち出し袋を準備しておくことが必要です。非常用持ち出し袋には最低限の生活に必要な水や食料、懐中電灯、携帯の充電器、救急用品などを入れておくと安心です。また、避難場所や避難経路などを家族で話し合い、共有しておくことも非常に重要です。実際に私も家族と一緒に避難場所や連絡方法を話し合いました。その他にも地域の避難訓練に参加し、実際にどうすればいいのかを体で覚えることができ、近所の人と顔を合わせることで、いざというときに助け合える関係ができるのも大きなメリットです。私も去年から地域の防災訓練に参加し、様々なことを学ぶことができました。加えて、大雨などによる通行止めで道路が通れなくなったときのために、避難ルートの一つではなく、二つ三つと考えておくとより安心です。家の近くの川や斜面が危ない場面では、遠回りでも安全な道を使うように心がける必要があります。

さらに日頃から、スマートフォンなどで利用できる気象情報や防災アプリをうまく活用して、雨の強さや災害の可能性についてこまめにチェックすることも大切です。私は、昨年からはアプリを使用していますが、大雨が降る際には通知が入ってきて、家族に知らせることができました。それによって、私の家族もアプリを利用し始めて、また一つ防災意識が高まったと感じられました。このように活用することで、早めの避難判断ができます。

土砂災害はいつどこで起こるかわかりません。突然の災害に対して何の備えもなしでいることはとても危険です。だからこそ、日頃の備えと知識が命を守る力となります。私たち一人ひとりが防災意識を高く持ち、家族や地域の方々と協力して備えていくことが本当に大切だと感じています。

最後に、土砂災害から身を守るためには、「知ること」「準備すること」「行動すること」

の三つが基本です。今回説明した、ハザードマップで危険を理解し、避難の準備を整え、気象情報を日々チェックして早めに安全な場所へ避難する。これらをしっかり心がけて、もしもの時に自分や大切な人を守れるようにしましょう。防災することは、自分の命を守るだけでなく、家族や地域の方々の安全を支える大切な活動です。これからも防災意識を高めて、土砂災害防止に役立てばいいなと思います。

「 私達の安全の裏側 」

東近江市立能登川中学校 3年 谷澤 あかり

「8月8日の7時から7時40分の約40分間に桜島の野尻川、有村川、黒神川、持木川において、土石流が発生しました。土石流は砂防設備内を安全に流下しており被害等は発生していません。引き続き土石流等の監視を継続し、桜島島内の安全確保に努めていきます。」このような文章が一本の動画と共にSNSに投稿されていた。どす黒い水の固まりが一瞬で砂防ダムを埋め尽くし、町中の川を怒り狂うように流れる様子に恐ろしさを抱いたが、被害は発生していないという状況と荒々しいが川という枠に収まっている水に安心感を抱いた。また、自然の力に人間の作った建造物が勝っていることに大きく驚いた。

私は丁度その日に大阪にある淀川ダム統管理事務所で一日所長体験をしていた。そこでは司令室で洪水予報を宇治市長に共有する体験や京都にある天ヶ瀬ダム湖の湖面巡視やダムの外壁の点検などを行った。ダムの湖面巡視では水質検査や法面の点検、網場と呼ばれるゴミや流木をせきとめる役割をしている網の点検などを体験できた。巡視船に乗っている時に浄水場へ水を送る取水口を見て、日常生活とダムの深い関わりを知ることができた。

私が一日所長体験を通して特に興味深く感じたことは、災害時の洪水予報や普段目にしていた川に流れる水の量もダムが出したり管理したりしているということだ。日々の生活に欠かせない水は自分が予想していなかった設備が支えていたことを知り、驚いた。

また、国土交通省関連として砂防ダムの管理も行っていることも知った。砂防ダムも、より町への被害が少なくなるような形に作り変えたり、環境を守るため魚道を作り生き物の通り道への配慮をしたりと日々工夫して下さっていることを知り、私達の生活や地球を守る砂防ダムの意外な一面に感動した。

家に帰った後、ふと疑問に思ったことがあったため、インターネットで調べてみた。幼い頃によく山登りやキャンプをしていたのだが、その時、山の中で見た砂防ダムは、もう砂で満杯になっていて、ダムというよりは人工の滝のように感じた。だが、砂がたまり切ってしまったら土石流をふさげないのではないだろうか。それはすぐに解決した。砂が溜まった砂防ダムによって土石流などが発生した場合でも山の傾斜を緩め、土砂の流れるスピードが緩やかになるのだそうだ。全ての事態に対応して設計されているような砂防ダムの魅力をまた一つ、知ることができた。

このように私達の暮らしを支え、安全を守ってくれている砂防ダムだが、その役割を知ったり、活躍を目にしたりする機会やそれに関心を持つ人は多くはないだろう。私自身、一日所長をしなければ知らなかった話もたくさんあった。「毎日」を当たり前で過ごしているからこそ、その毎日を支えて下さっている人や建物の努力は注目を浴びにくいのだ。しかし、砂防ダムが無ければ洪水や氾濫の危険が高まり、広範囲にわたる被害が起きたり、被害地域が拡大したりする可能性が高くなる。近年頻発している異常気象から私達を守っているものは砂防だと言っても過言ではない。

ではどうすればより多くの人に砂防ダムの活躍を知ってもらえるだろうか。

一つはダムを見学ツアーや観光プランとして取り入れることだ。美しいダム湖や巨大な砂防ダムは充分見所があるだろうし、多くのダムで発行されているダムカードを集めるということも良いダムを知る旅に繋がると思う。

二つ目は冒頭の桜島のようにSNS等でダムについて積極的に調べたり発信したりする

ことだ。正しいダムの情報を伝えていきたい。

毎日はいつまでも続くものではない。だから、毎日を支えている人や物に心から感謝したい。ありがとう。心から。